

2020年11月

今月の新着図書から

小玉武『評伝 開高健：生きた，書いた，ぶつかった！』

(ちくま文庫，2020年)

高等科図書主任

林 知宏

開高健(1930-1989)は、昭和30年代にデビューした戦後を代表する作家の一人である。大阪の出身で、西鶴や近松の系列に属するともいえる人物である。当初は壽屋(現サントリー)宣伝部のコピーライターとして活躍した。学生時代に創作を始め、昭和33年「裸の王様」で芥川賞を受賞し(大江健三郎と争ったことで知られる)、作家としての地位を確立する。フィクション、ノンフィクションの区別なく発表し続けた。私が愛読してやまない一人である。『開高健短編集』(岩波文庫)にも含まれる処女作「パニック」、芥川賞受賞作は、今読んでも新鮮さを失っていない。『日本三文オペラ』のような特異な作品もある。また、『週刊朝日』の特派員としてベトナム戦争の現地取材を行い、その体験をベースにした『ベトナム戦記』、『輝ける闇』、『夏の闇』を世に送り出した。当時の世界情勢に応じつつ、一過性の話題取りにとどまらない普遍性を持った作品群である。さらに世界中を巡った釣り紀行、『フィッシュ・オン』、『オーパ!』もある。私の中では、昭和の時代にサントリーのCMにご本人が登場していたのが印象深い。記憶に残るCMとしては、岡本太郎のものと双璧ではないか。また、前回の東京オリンピックの時代を描いたルポルタージュ『ずばり東京』が、個人的には偏愛する作品である。高度成長の象徴であったイベントに沸く東京の裏と表、複数の場面を異なる文体で変幻自在に描き、まさに作家としての才気が満ち溢れている。数多くの開高作品の中でも強く勧める一冊である。

こうした開高の生涯をテーマに描いたのが本作品である。著者小玉武は、サントリーに入社後、後を継いで広報誌『洋酒天国』の編集にあたった人物である。開高自身の姿を身近でリアルに知る人物ということになる。開高の作品は対象との距離感、文体のドライさが好ましい。小玉は、開高自身の「内面に寄り添わない文章を書く」というモットーや、「必然の歯車は強力だけれど、偶然がもたらす自由と展開は必然の骸骨に肉と眼をあたえる」と述べたことを紹介している。開高作品は、人間観察の鋭さ、深さを特徴とする。その核心を的確に表現した言葉だ。自伝的な作品『耳の物語』を引用しながら、その人生と作品とを追究する。『夏の闇』のモデルの詮索もあり、実に興味深い伝記となっている。

昭和が終わり、新たな時代が始まった時に開高は病に倒れ、この世を去った。享年58歳であった。私はすでにその年齢を過ぎてしまった。開高健を失って早くも30年以上が経つ。仮に存命であったならば、今の混迷する世界をどのように描くのであろうか。